

『ちくま評論選』解説

13 生命倫理試論 村上陽一郎

■凡例

- 1 ①②…は形式段落番号。◆は、設問。 2 ▽は、本文の追跡・分析。
3 ▼は、読解に関する技法。 4 ☆は、記述に関する技法。

■前提 『現代文キーワード』第二章「科学」

■追跡

- ① 生命倫理の問題が起こってきたのは、決してそんなに古い話ではありません。

▽バイオエシックス【bioethics】生命科学の進歩によって出生と死への人為的介入が可能になった結果生じた、新しい倫理的諸問題に対処する応用倫理学の一分野。人工受精・妊娠中絶・脳死ならびに臓器移植などの問題について論じる。患者の自己決定権などをめぐる医療倫理とも関連。生命倫理。(大辞林)

② もちろん、医療倫理ということになれば、それこそギリシア時代から、「ヒポクラテスの誓い」など、医療者の倫理という問題意識は常にあったわけです。しかし、私たちが今直面している生命倫理の問題は、こうした◆問1「伝統的な職能に関わる倫理」とは意味合いが違います。議論しなければならぬ、いや、議論だけではなくて早急に決断を下す必要を突きつけられた課題です。

▽ヒポクラテスの誓いを現代的な言葉で表したのが WMA (世界医師会) のジュネーブ宣言(1948年)。「ジュネーブ宣言」医師として、生涯かけて、人類への奉仕の為にささげる、師に対して尊敬と感謝の気持ちを持ち続ける、良心と尊厳をもって医療に従事する、患者の健康を最優先のこととする、患者の秘密を厳守する、同僚の医師を兄弟とみなす、そして力の及ぶ限り、医師という職業の名誉と高潔な伝統を守り続けることを誓う(日本医師会HPより)

◆問1「伝統的な職能に関わる倫理」とは？

文字通り言い換えれば、昔から伝わる職業上の倫理。例を足した解答例を示す。
(解答例)「医療者にギリシア時代から伝わる「ヒポクラテスの誓い」のような、「特定の職業共同体の中で」昔から伝わる職業上の倫理。」

- ③ 言うまでもなく、現在の生命倫理の問題が展開される背景には、科学技術の急速

な発展がありました。かつては、生物学、生理学、医学などと呼ばれていた諸領域が、今では「ライフ・サイエンス(生命科学)」という言葉で括るしかないほど広範囲かつ複雑にかかわりあい、進化しました。けれど、そこにおける倫理観というものを、科学者たち自身は必ずしもヒリヒリとした現実感覚の中で感じているとはいえないのです。

④ それは、科学者共同体が一般社会と隔絶しながら科学を進展させてきたことと、関係していると私は思います。今日、生命科学にのぞんでも、科学者が自らのうちに見出だす倫理観というものは、ギリシア時代の「ヒポクラテスの誓い」と同じく仲間内の行動規範にすぎないのかもしれない。科学者自身も社会の側も、当たり前のようにして、こういう状況を歴史の中でごく自然に受け入れていたところに、◆問2「結び」という言葉が適切かどうかわかりませんが、が生まれてきた。そのもつとも顕著な部分の一つが、生命科学の展開に伴ってあからさまになってきた、ELSI(倫理的・法的・社会的問題)と言われる問題です。

◆問2「結び」とは？

辞書では、比喩的な意味として「現実に合わせて変わってこること」という意味が示されている。傍線部を含む一文を、指示内容などを補って言い換えると、

「科学者自身も、社会の側も、こういう状況に科学者共同体が一般社会と隔絶している状況を歴史の中でごく自然に受け入れていたところに結びに現実とは合わない事態が生まれてきた。」☆傍線部延長・指示内容補填。答案はこれを使って、
(解答例)「これまで、科学者共同体は、一般社会と隔絶しているものと受け止められて来たが、その状況では、現在の生命倫理の問題には対応できない事態になっているということ。」

⑤ 私は、ここで、【読解問題1】かなり大きな歴史的な転換が起こっているように思います。

⑥ 科学化された社会に「公共的課題」というべきものが生まれてくる。たとえば、ES細胞や臓器移植、生殖医療の研究や実験に際して、生命をどうとらえるのか、そこで何をやってよく、何をやってはいけないのかという問題が、従来のような科学的な判断ではなく、公共的な判断として、答えを迫っているとも言えます。

⑦ この点で、従来の考え方でいけば、非常に簡単なわけですが、何か判断に迷うような事柄があったとしたら、その分野の科学者共同体に遡れば、かならず判断権がある、という考え方は、その根拠は、「専門性の優位」であり「科学的合理性」と言っているからかもしれません。政治権力を媒介にして、研究の結果が一般社会に影響するようになってからも、政府などにおいては現在でも、この専門性に優位を置く考え方が残っています。公聴会や円卓会議、ヒアリングなどをきかんに試みますが、それは◆問3「一種のセレモニーであって、最初から落としどころは専門家の判断権に委ねる、という発想です。」

▽「公共的(社会的)」と「科学的(専門的)」という対比をチェック。「みんな」と「特定の人で」という対比だ。

◆問3 「一種のセレモニー」とは？

「セレモニー」＝儀式。内実を伴わない形式的な儀式、という意味合いを含む。公聴会とは一般の人々の意見を聞くこと。☆文の形を考えると、「形式的にはくだが、実質的にはく」という対比を思いつく。☆対比的に書く、と、書き落としを防ぎ、シヤープに書ける。覚えておいてほしい。

(解答例)「形式的には一般の人々の意見を聞くが(それは聞くだけで)、実質的には専門家の判断によって決定することになっているということ。」

⑧ これに対して、現在では、もう少し別の解答があり得るわけです。

⑨ キーワードは、「社会的合理性」で、必ずしも専門家による「科学的合理性」を否定しませんが、それだけでは成立しない、という考え方です。

⑩ この「社会的合理性」を、社会の成員である人々に求める動きが、ここ二、三十年間に世界的にいろいろなかたちではじまるようになりました。当然のことながら、社会の人々の中には宗教者も無神論者も唯物論者もいるわけで、その中で絶対的な「科学的合理性」ではなく相対的な「社会的合理性」をいかにして求めるか、これは言うは易く行うは難しです。

⑪ 公共(パブリック)的課題に対しては、民主(デモクラティック)的方法で。つまり専門家も他のひとと同等の立場で、公共の場で議論して、その中で落ち着きころを見出だしていこうという考え方です。多くの一般市民が公共的課題に対する専門家の関与の仕方に満足しないし、しかも現代、専門家が専門的であるという事は限りなく狭いのです。たとえば物理学会で、ある物理学者が自分のワークショップの隣を覗いてみたら、これが全くわからない。また、細胞生物学のある学術誌で通る論文が、同じ業界の別の雑誌では拒否される。そこまで専門性は細分化していて、しかもジャーナル依存の状況なのです。

⑫ 同じ領域でさえ共通理解をもつことの難しい研究者が、ユニバーサルな問題に対して何らかの裁断権を持つなんて、ほとんど◆問4ナンセンスです。

▽二つの考え方。「専門家が正しい」といつたら正しい／「専門家一般の人々が議論して落ち着いたところを正しいとする」。後者は、なんとなく、政治的な議論に似ている。あるいは、裁判員制度とか。医療でも、かつては「医師の判断は絶対」だったが、今は、患者や家族と話し合った上で決定するというのがふつうになっている。あらゆる領域で、この変化が起きている。

◆問4 「ナンセンス」というのはなぜ？

「どういことがナンセンス(無意味)なのか」と問う。答えは、直前、「同じ領

域でさえ共通理解をもつことの難しい研究者が、ユニバーサルな問題に対して何らかの裁断権を持つ」ということ。これをわかりやすくして、「から」で結ぶ。

(解答例)「同じ専門領域でさえ、(細分化のため)共通理解をもつことが難しい研究者たちが、一般的な(社会的な)問題に対して、一般の人々から共通理解を得られるように裁断する力を持つことは(とても)できないから。」

⑬ 「生命倫理」という言葉は、専門家と市民との間で、受け取られ方がかなり違うと思います。専門によっては、生命倫理に否定的な先入観を持つ場合もあります。つまり、研究者には生命倫理がある種の拘束として映り、「自由な研究を防げる」という雰囲気から少なからず見受けられる場合もあります。したがって、市民社会に充分な「社会的合理性」が見られても、実際に科学者に影響を及ぼしにくいような、この垣根の高さをしばしば感じさせられます。◆問5同時に、市民の間でも、これまでにメディアで取り上げられた遺伝子治療から生殖技術、脳死問題、臓器移植など、倫理的な課題に対して、正しい情報に基づき議論が成熟したものは決して多くはありませんでした。

▽専門家と市民の間にある溝。双方の問題とは？ 専門家は、生命倫理が「自由な研究を防げる」のではという危惧を抱く。だから、市民の意見が拒否されてしまう。科学者は、聞く耳を持たないわけだ。市民は市民で、正しい情報に基づき、成熟した議論ができていない、つまり、素人の感想の言い合いのようなものにすぎない、といった実態があつたわけ。

◆問5 「同時に」とは何と同時か。

傍線部より前をまとめる。科学者＝専門家を主語に。

(解答例)「科学者が、生命倫理が自由な研究を防げるのではないかと考え、市民の意見を受け入れようとしないこと。」

⑭ そういう事態の中で、公共的課題に対して民主的方法で、社会的合理性を求めようということになった時、さて科学者はどうなるか。ここで【読解問題2】科学者は、もはや裁判官の地位を降ろされ、「一人の証人」としてその現場に立つ以外にないのです。

⑮ それと同じことが、たとえば宗教者にも言えるのではないのでしょうか。

⑯ どの宗教も、ある生命倫理の問題に、教理から演繹的に裁断できるのでしょうか。これは意見が分かれるところで、おそらく古典的な問題(たとえば殺人)についてはできるでしょうが、今日的な問題、たとえば臓器移植や遺伝子診断、脳死は人間の死か、という疑問に宗教が絶対的な倫理的結論を導き出すことは難しいと、私は思っています。

⑰ 逆に言えば、そもそも倫理というのは、宗教を離れても存在し得るものです。

⑱ 昔、バテレンが日本にきた時、キリスト教が支配していない社会で、これほど高

い道德が人々の行動を律していることに驚いた、とある意味では僭越なことをローマに書き送っています。今、新渡戸稲造の『武士道』が再び人気ですが、彼があれを書いたのはアメリカへ行って「社会を律する宗教がない国の教育で、道徳などあり得るのか？」と問われたことが動機だといえます。そうだとすれば、倫理的な価値基準というのは宗教を離れても充分にあり得る。日本のそういう倫理的な価値観が、日本の自然信仰や神道、仏教や道教や儒教など諸宗教・哲学から影響を受けていることも確かでしょうけれど。

⑲ そういう意味で、宗教と同じように哲学も科学もほかの専門家も、できることは何かというと、組織的にでなく一個の人間として、自らの立場（無神論も含めて）に拠りながら「証言台に立つこと」以外に、私には考えられないのです。

⑳ ドイツの議会が一九九九年から二〇〇二年にかけて、ES細胞を輸入するかどうか、大議論をしました。

21 その時に、私はたいへん感銘を受けたのですが、議会、政党は、◆問6 党議拘束を一切外し、議員一人一人に自分の信念に基づいてどう考えるかということを経言させたのです。中には医者も神学者も哲学者も科学者もいます。それぞれの証言を聞いた上で、最後に投票をしました。その結果は「諾」が過半数を占めました。

22 ある意味では、「ヒト胚を利用はしないが、ES細胞は輸入する。」というのは虫の良い話で、ドイツは、原子力発電も原則廃止を言いながら、フランスやベルギーの原発からの電力を使ったりしているのも併せて、結論はいささか問題でないことありません。けれども、一人一人が証言台に立つという方法は、党議拘束を外すだけではなく、宗教的拘束も専門的拘束も外して、「人間として私はこう考える。」と発言することになります。

▽繰り返されるキーワードは、「一人一人」。一人一人が、自分にまわりついているさまざまな自由になって、単独の、一人の人間として考え、判断する、ということ。筆者はその重要性を説く。

◆問6 「党議拘束を一切外し」たのは何のためか。

傍線部直後を見れば、「一人一人に自分の信念に基づいてどう考えるかということを経言させ」るため、とまずはいえる。さらに詳しく、この場合のみ、党議拘束を外したのはなぜか、について補う必要がある。一般の政策についての賛否なら、通常一つの党は同じ考えを持っているし、異なる考えを持つ議員がいたとしても、最終的には党の意見に同調するように拘束をかける。しかし、この場合——ES細胞を輸入するかどうか——については、通常の政策の次元（社会の選択肢）の問題ではなく、生命というものをどう考えるか、という、一人一人の問題だと、ドイツの議会では考えたということだ。

（解答例）「ES細胞を輸入するかどうかという問題は、生命というものをどう考えるかという、一人の人間としての問題なので、一人一人が自分の信念に基づいて自由

に証言できるようにするため、党議拘束を外した。」

23 民主的といい、社会的合理性といっても、それらがどこかにあらかじめ存在しているわけではありません。ある社会の中でメンバーたちが、そういう言葉を使えば、実存をかけた自分の証言の塊の中から、おのずから形成されていった結果のものが【読解問題3】社会的合理性」ではないかと私は考えるのです。

■読解問題

① 「かなり大きな歴史的な転換」とは、どのような「転換」か、説明しなさい。転換・変化の対比をまとめる問いになっているのはわかる。さて、どこを使うか。候補となる箇所を拾い出そう。昔・これまで・従来↓現在・最近、という変化に気をつけて。例えば、

⑦ この点で、従来の考え方でいけば、非常に簡単なわけです。何か判断に迷うような事柄があったとしたら、その分野の科学者共同体に遡れば、かならず判断権がある、という考え方です。その根拠は、「専門性の優位」であり「科学的合理性」と言っているかもしれません。

⑧ これに対して、現在では、もう少し別の解答があり得るわけです。

⑨ キーワードは、「社会的合理性」で、必ずしも専門家による「科学的合理性」を否定しませんが、それだけでは成立しない、という考え方です。

⑩ この「社会的合理性」を、社会の成員である人々に求める動きが、ここ二、三十年間に世界的にいろいろなかたちではじまるようになりました。

⑪ 公共（パブリック）的課題に対しては、民主（デモクラティック）的方法で。つまり専門家も他のひとと同等の立場で、公共の場で議論して、その中で落ち着きどころを見出だしていこうという考え方です。

材料はここらにあるが、組み立ての骨格は独自に考える方がいい。シンプルに間違いない形・骨組みを設定すること。「これまでは科学者だけ、これからは科学者と一般の人で。これを崩さず。」

【解答例】「これまでは、科学的な問題について、その分野の科学者共同体の専門家に「科学的合理性に基づく」判断をしてもらえばよかったが、現在は、生命倫理のよいうな公共的課題について、専門家と一般の人々が公共の場で議論して、「社会的合理性があるかどうか」判断することが求められるようになってきたこと。」

「科学的合理性」「社会的合理性」というキーワードを対比的に入れてみたが、必

須ともいえない。「生命倫理については、科学者だけでは対応できず」といった言葉を入れてもよい。

②「科学者は、もはや裁判官の地位を降ろされ、「一人の証人」としてその現場に立つ以外にない」とあるが、その理由を説明しなさい。

前後をよく見る。これが基本。

⑭「**そういう事態の中で、公共的課題に対して民主的方法で、社会的合理性を求めようということになった時、さて科学者はどうなるか。**ここで【読解問題2】科学者は、もはや裁判官の地位を降ろされ、「一人の証人」としてその現場に立つ以外にないのです。」

⑮ **それと同じことが、たとえば宗教者にも言えるのではないのでしょうか。**

「**そういう事態**」とは？ 「それと同じことが宗教者にも言える」のはなぜ？

「**そういう事態**」＝①**専門が細分化している事態**。②**科学者と市民に隔たりがある事態**。

「それと同じことが宗教者にも言える」については、⑯段落を見よ。

⑯ **どの宗教も、ある生命倫理の問題に、教理から演繹的に裁断できるのでしょうか。**これは意見が分かれるところで、おそらく古典的な問題（たとえば殺人）についてはできるでしょうが、今日の**科学的な問題**、たとえば臓器移植や遺伝子診断、脳死は人間の死か、という疑問に**宗教が絶対的な倫理的結論を導き出すことは難しい**と、私は思っています。」

これと同じことが「科学」にもいえるわけだ。「宗教」を「科学」に置き換えれば、「どの分野の科学も、ある生命倫理の問題に、**科学的な原理から演繹的に裁断できる**でしょうか。おそらく古典的な問題（たとえば一般的な死の定義）についてはできるでしょうが、今日の**科学的な問題**、たとえば臓器移植や遺伝子診断、脳死は人間の死か、という疑問に**科学が絶対的な科学的結論を導き出すことは難しい**。」

生命倫理の問題には、その分野の固有の原理だけでは結論が出せない。

二つの要点がある。

一つは、生命倫理のような科学に関係する**現代的な問題**は、科学固有の原理から結論を導けないこと。だから、他の分野を含む一般の人々も交えて考えなければならぬ。——これは、現代的な問題の特徴に由来する理由。

二つ目は、科学者の**共同体**が、その内部で**細分化**し、かつ、市民と隔たっている点で、科学者**共同体の考え方を多数に理解させ納得させる**ことができないこと。——これは、コミュニケーションの問題。

この二つを答案に盛り込む。

傍線部「科学者は、もはや裁判官の地位を降ろされ、「一人の証人」としてその現場に立つ以外にない」のいいかえ、として**答案を作っていく失敗がない**。文末は「から。」

【解答例】「科学者は、生命倫理のような問題について、科学固有の原理から結論を

導くことはできず、他の分野を含む一般の人々も交えて考えなければならず、また、科学者の**共同体**が、その内部で**細分化**し、かつ、市民とも隔たっている点で、その考え方を**多数に理解させ納得させる**こともできないため、（専門家としてというより）**一人の人間として自分の意見を表明するしかないから。**」

③筆者は「社会的合理性」がどのようにして求められるものだと考えているか。

直前にまとめて書いてあるので、まずはそれをベースにする。

「ある社会の中でメンバーたちが、…実存をかけた自分の証言の塊の中から、おのずから形成されていった結果のもの」。

（解答例1）「ある社会を構成するメンバーが、**実存をかけた自分の証言をする**から、おのずから形成されていった結果生まれる。」

「実存をかけた自分の証言をする」が、わかりにくいかな。

⑯の「組織的にでなく一個の人間として、自らの立場（無神論も含めて）に拠りながら「証言台に立つこと」が言い換えに使える。

（解答例2）「ある社会を構成するメンバーが、**組織的にでなく一個の人間として、自らの立場や信念に基づいて発言し、話し合う中から、自然と形作られていく。**」

問い方を変えられて、例えば、「筆者は生命倫理の問題についてどのように判断すべきだと考えているか」と聞かれたらどう答えるか。問いの角度によって、自在に答えられるように。

（参考例）「生命倫理のような公共的課題については、**専門家による「科学的合理性」**だけでは判断できず、**社会の構成メンバーが、一個の人間として、自らの立場や信念に基づいて発言し、話し合う中から、自然と形づくられていく「社会的合理性」**によって判断する必要がある、と考えている。」

筆者は、生命倫理を例に取りあげていたが、現在の科学や技術に関する問題は、すべて、ここでいわれている「**公共的課題**」だと考えていい。原発の問題、薬害の問題、ネット依存・ネットトラブルの問題…。

しかし、問題は、そういった議論に参加する公共の土台、具体的な場がなかなかない、ということだ。

市民参加の判断といえば、裁判員制度もそうだが、もう一つの問題は、その肝心の市民に判断しようとする**主体性**があるか、ということだ。能力や知識の問題というよりも、**真摯に公共的な問題について考えようとする態度**を持っているかという問題だ。実存（交換不可能なこの私）、という語があったが、多くの人が関係する問題に、この自分の判断を賭けてみようという**意欲**のようなものが私たちにあるのか。

たんなる、交換可能な消費者だのキャラだのには、手に負えない問題ではある。